

ちょっと待って! その抗菌療法
エビデンスに基づいている?

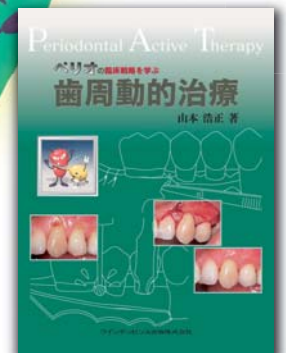
歯周抗菌療法

—感染症医的な視点から—

●山本 浩正：著



ペリオ三部作 (既刊)



CONTENTS

- 第I部 感染症学 : 感染症を再考
- 第II部 抗菌薬 : 抗菌薬の知識を整理
- 第III部 歯周抗菌療法 : 歯周抗菌療法の理解

●サイズ:A4判変型 ●112ページ ●定価:7,770円(本体7,400円・税5%)



クインテッセンス出版株式会社

〒113-0033 東京都文京区本郷3丁目2番6号 クイントハウスビル

TEL. 03-5842-2272 (営業) FAX. 03-5800-7592 <http://www.quint-j.co.jp/> e-mail mb@quint-j.co.jp



不十分な知識で投与すると耐性菌を増やす結果になる

- ・抗菌薬の使用効果を文献で検証しながら、問題点も挙げてわかりやすく解説
- ・臨床家に馴染みのある抗菌薬について、情報をアップデート

コラム de 感染症⑦

時間依存性と濃度依存性

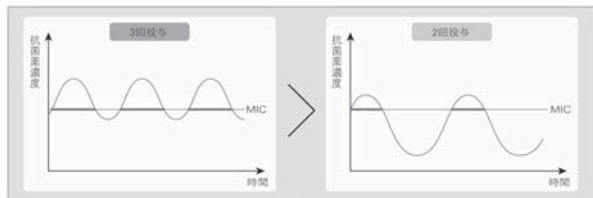


図1 時間依存性抗菌薬。MICを超えている時間(time above MIC, 赤線の部分)が多いほうが効くので、左図のように投与回数が多いほうが望ましい。

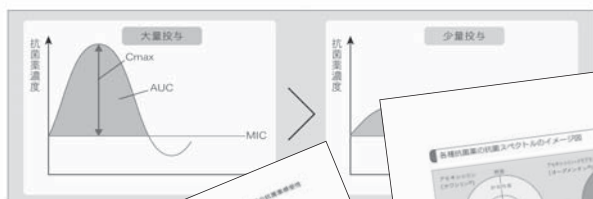


図2 濃度依存性抗菌薬。MICをどれだけ超えているか(AUC)によって効果は異なる。AUCが大きいほど効果は大きい。

コラム de 感染症⑤

選択毒性



図1 選択の変化。細菌と宿主細胞があったときに細菌を選択する、というのが本来の選択毒性という意味であったが、今では感受性菌を選択して耐性菌が生き残るという状況になってしまった。

抗菌薬は細菌に対して特異的に作用するものである。宿主の細胞には毒性がなく、細菌にだけ毒性をもつ抗菌薬には“選択毒性”があるわけだ。このように、最初に生きてきた細菌が、抗菌薬の作用によって死滅し、生き残った細菌が、再び増殖して増えるようになる。これが、耐性菌の出現である。細菌は条件によっては20分に1回くらいの猛スピードで分裂するので、突然変異性をもつ抗菌薬には“選択毒性”があるわけだ。このように、最初に生きてきた細菌が、抗菌薬の作用によって死滅し、生き残った細菌が、再び増殖して増えるようになる。これが、耐性菌の出現である。



〈本書より〉

CONTENTS

第I部 感染症学

- 第1章 医科における感染症治療のコモンアプローチ
- 第2章 感染症の再考
- 第3章 臨床細菌学概論

第II部 抗菌薬

- 第1章 ペニシリン
- 第2章 セファロスポリンとカルバペネム
- 第3章 キノロンとアミノグリコシド
- 第4章 マクロライド
- 第5章 その他の抗菌薬 (クリンダマイシン, メトロニダゾール, テトラサイクリン, クロラムフェニコール)

第III部 菌周抗菌療法

- 第1章 菌周細菌のバイオロジー
- 第2章 菌周細菌の抗菌薬感受性
- 第3章 菌周抗菌療法の効果と課題

きりとり線

注文書

菌周抗菌療法 —感染症医的視点から—

モリタ商品コード:805484

冊注文します。

●お名前	●貴院名	●ご指定納入店
●ご住所 (〒)		
●TEL	●FAX	

支店・営業所

※ご記入いただいた個人情報は、弊社の新刊案内、講演会等の案内に利用させていただきます。
※ご指定納入店がない場合は送料をいただき、代金引換宅配便でお送りさせていただきます。